第２回高知県社会教育委員会（平成 27 年２月１日～平成 29 年１月 31 日任期）会議概要

平成 27 年８月 25 日（火）13:30～16:30

高知県教育センター分館２階　21 研修室

１．開会（13:30～13:40）

高知県社会教育委員長挨拶

２．議事（13:40～16:20）

協議

「中山間地域のコミュニティの活性化～ふるさとを愛する心を育む体験活動を中心として～」

【事務局より日程説明】

【前回欠席の委員より活動報告と質疑・協議】

（委員）

四万十川流域に住み、生態学や自然再生などに取り組んでいる。

私は淀川流域で生まれ、高知大学を卒業後、東京や筑波の研究所で河川の保全に関する仕事をしていた。その後、四万十川流域に戻ってきた。

専門分野は、魚類学や景観生態学で、流域の保全研究や空間情報の解析などをしている。それ以外には、高知工科大学で「生物環境のデータサイエンス」という講義・実習や、奈良文化財研究所では、日本の重要文化的景観の保全にかかわっている。そして「はたのおと」の活動をしている。四万十川流域は重要文化的景観指定されており、それに客員研究員として参加している。

研究テーマは、テナガエビの保全研究に取り組んでいる。いま四万十川でテナガエビが激減していて、川漁師が困っている。毎月データを取って４年目になる。今は県内各地の河川へ範囲を広げてデータを取っているところである。このままでは絶滅の可能性が上がってきているので、何とか復活させようということである。

それ以外に流域の自然再生ということで、研究するだけではなく実践型の活動に取り組んでいる。海は環境省が自然再生しているが、河川は管理外なので手をつけられない。それで放置されてるところを、自分たちで自然再生しようということでデータを毎月取って、魚類が上れない堰堤では、流域の山から間伐材を切出して、河床に溜まった礫床を活用して石を詰めて魚が上れるよう魚道をつくっている。結果としてうまく魚類が上ってくれた。高知新聞が取材をしてくれ、今も継続中である。

冒頭に出た研究会「はたのおと」という名前は、探求する「ノート」と発信する「音」をかけて「はたのおと」という名前をつけた幡多地域の研究会である。研究発表会は、2011 年から地元の行政と連携して年１回行ってきた。今年度「はたのおと 2015」は、１月に三原村で開催した。現在 2016 を準備中である。

この研究発表会の特徴は、一般聴講者が上から目線で講演者の話を聞くということにある。分からないことがあれば「分かりません」と容赦なく言われる。なので、専門的な話を一般の方に分かるように話さなければいけない講演者泣かせの発表会である。

2011 年は、幡多を訪れ研究する人たちや、住み込んで地元の探求をしている人たちの発表を行った。

2012 年は黒潮町で開催、地域に住んでいろんな探求をしている人や、経済活動をしている人たちの発表に加え、高校生も発表した。

2014 年、土佐清水で開催した研究発表会では、地元の人が、どんどん質問してくださるので、楽しい発表会となった。2015 年の三原村では、三原村の森林組合がシカを捕るわなの新型を紹介した。バネを使わず高齢者でも

危険がなく、しっかり成果を上げているという成果を発表した。東京や九州の大学からここへ見に来られている。
環境学習としては、大阪から来た中学生や、土佐清水市の小学校の総合学習の授業で川の授業に取り組んでいて、今年で５年目になる。また、四万十高校では2007年からずっと川の実習を続けている。
高知市の「とさっ子タウン」という子どもたちのまちがあるが、そこでも魚の教室という授業をやっている。
大学の授業では、生物環境を保全する仕事に興味のある学生たちが実務的な技術を学んでいる。

（委員長）
委員の報告を受けて、少しディスカッションしたい。
興味のある学生が自然再生の授業に参加しているということだが、興味がある学生とそうでない学生の違いはどこにあると考えるか。

（委員）
学生がそういう仕事を将来の自分の職業として捉えている場合は、やはり興味を持っている。

（委員）
私は、四万十川支流で生まれ育ったものですから大変興味深く、またこういった活動や研究がなされていることを初めて知った。私が幼い頃はテナガエビがたくさん捕れて、アユも100匹200匹捕れた時代であったが、環境が変化したからだろう。自然再生がうまく進まなかった理由に、縦割り行政の話があったが、その辺をもう少しお聞きしたい。

（委員）
まずテナガエビについては、地元の川漁師も言っていることだが、捕りすぎが原因である。
現在は外に売れる時代。価値が出てきたので、どんどん捕って外へ出している。捕りすぎて希少価値が出てキロ単価が上がると、もっと一生懸命捕るので更に減少する悪循環。
私自身は、子どもが川で泳いでテナガエビがどんどん突けるぐらい生息してほしいと思うが、今はそうではない。さてどうするかということで、四万十川漁協連合会の方々が協力してくださり、何か手を打っていこうと取り組んでいる。その有効的な案を出さないといけない。一年中禁漁にしてしまうと、民宿や旅館は経済的に成り立たなくなって、地域経済に大きな影響を与えてしまう。そうではなくて、個体群が将来絶滅しないで存続できるようにモニタリングしながら考えていくということが必要だと思う。
次に、縦割り行政のことについては、行政に対してやってくれと依頼をするのではなく、自分たちでやるので協力して欲しいとアプローチしている。行政主導の市民参加ではなく、市民主導で行政が参加してくるしくみである。土佐清水市の川で小さな自然再生に取り組んだが、「研究会はたのおと」メンバーが現在50人弱（年齢が２歳～57歳まで）いて、その中には、ログビルダーとか山の森林整備、河川工学の技術士をしているなど、特殊な技能を持つ人がたくさんいるので、自分たちで予算を確保して活動する。そこに高知県や土佐清水市といった行政が後援として入ってくれている。実際、このときは土佐清水市長が石積みの作業を一緒してくれてた。
今までこういった事業がうまく進まなかったのは、行政に陳情してやってもらおうとするので、縦割りが弊害になったが、地元の研究会が主導的に動くと縛られることなく自由に動ける。
やってみると、今まであちこちでぶつかってきた壁を感じず活動ができた。今年も既に予算を確保していて、秋からまた活動をすることにしている。

（委員長）
それでは、次の取組をご紹介いただく。

（委員）

教員に採用になり、主に小学校教員から学校長までの道筋と、かつて在った香美教育事務所やその後、県教育委員会でいろいろな経験をさせていただく中で、「体験活動」は自分の中の一番の軸になっている部分なので、今日はその部分のお話をしようと考えている。前に新聞を一つ張っていただいたが、これは高校生が自分たちの活動の最後のまとめを、もっと楽しい新聞の形にして締めくくりたいと言って仕上げたもの。

実は「こどもエコクラブ」という環境省の事業があって、全国のこどもエコクラブ事務局が委託を受けて実施している事業である。

この事業が始まった２年目、当時香美市の楠目小学校で環境教育に取り組んでいるときに、この事業に取り組みはじめて今年で 20 年目を向かえる。今は教育長をする傍ら、土日に子どもを集めて活動している。今年は 50 名以上の子どもが加入して、常時 30 名くらいが入れ替わりながら活動している。子どもたちは、何か一つやれば、次はこんなことも知りたい、この人に会ってみたい、こうやったらどうなるだろうかと言うので、じゃあやってみようか、どうすれば実現できるか話をしながら組み立てていく。日ノ御子というきれいな川で遊んでそこの様子を学んだり、森林鉄道が走っていた昔の話を聞いたり、本山町ではジビエ料理のフェスタがあって、シカの害の問題にずっとこだわっている子どもたちなので、そこで学んだエゾジカのことも記事に紹介している。

シカの害で山がもう大変なことになっている。どうしょうかとありとあらゆる活動をしているけれど、いくらやってもなかなか山がよみがえらない。そこで、じゃあ自分たちで山をつくろうということで、ブナの森にしようと種を取ってきて、苗を育て植えに行ったり、それから希少生物をよみがえらせたいと、ありとあらゆることに取り組んでいる。この子どもたちは小学５年生か６年生ぐらいから、高校２年生までずっと続けてきた子どもたちなので、大人が全然見なくても、さらさらと書き上げるくらいに育ってくる。

この新聞を書くにあたっては、高知新聞支局を訪ね、そもそも新聞はどのように作るのですかと質問したり、紙面の取り方を教えていただいて作っていった。子どもたちは、自分たちの考えたことを次々追求していく。大人よりもずっと柔軟で、その行動力は目を見張るものがある。「体験」をとおして、子どもたちの考える力や追求する力、いろいろなものが育つという手応えを持っている。

それでは方向を変えて「こども会議」という環境活動を述べさせていただく。

１枚目の資料「集まれ、未来の香美市長」というのは、最初は教育委員会が子どもを集めて、大人が仕切ってこども会議を行っていたが、それでは面白くないと。そこで実行委員を子どもが行うことにした。そのときに出したチラシ。

14～15 名の子どもが集まって実行委員を立ち上げた。参加した子どもは小学生、中学生、山田高校生、ほんとは工科大も一緒に活動して欲しかったが、最初の会の立ち上げが思ったより手間取ったこともあって、工科大はバックアップをしてくれている。実行委員会で、どんな会議にするのか、どうすればよいのかをずっと話合ってきたが、学校での特別活動が実に進んでないというのがよく分かる。子どもたちは会議をすることができない。教えることは簡単だが、どんな準備が要るとか、会議とはそもそもどんなイメージなのか、前段の３回がとても大変だった。各学校から「自分たちで実践していること」、「やってみたいこと」、「要望したいこと」、この三つを出し合って話をしたが、１回目の子ども会議では、なかなか先へ進まなかった。仕方がないので２回目を開催することになった。そこで出されたものを実行委員会が引き取って、みんなの思いを形にしていく活動を行っている。

集まった実行委員に、はじめに投げかけた言葉は、「子どもには一人一人うちに秘めた力がいっぱいある。一人一人の力はすごいけれど、みんなの力を合わせればとんでもなくすごいことになる。だって、子どもにはましてみんなに尽くす行動力があるから、きっと大人はかなわない」そして会議はスタートした。

やってみたいことを子どもたちにきくと「あいさつ運動」と「ごみ拾い活動」しかアイデアが出ない。子どもからは、やったことのないことはなかなか出てこない。

次に「子ども主体のお祭りをしたい」。お祭りは 12 月の 27 日に、庁舎のすぐ南側に日曜市広場があって、そこ

の屋根の下を半分借りて、地域の活性化のために子どものお祭りをやる。舞台をつくりいろいろやりながら、お店も出そうという計画。

三つ目の「香美市をＰＲするパンフレットを作成する」というのは、各学校ごとに小さな本を作るそうである。「香美市の歌を作成」というのは、歌詞を作って、その歌詞に曲をつけてくれる人を募集しようという取組。

それからポスターを夏休みに募集し、子どもたちが審査をして表彰する取組など。

実行委員はこの夏休み中には、今紹介した内容をどこでやろうかと、日曜市広場の責任者に相談に行って場所を貸してもらったり、舞台はどうしたらいいかと、書類はどうやって出せばいいか、歌も有名な人にお願いに行ったが断られたりしながら、どんどん動きながら、形にするために必死になって活動しているところである。

やっていくうちに子どもたちは、自ら課題を見つけ、話し合いながら進めている。いよいよ困ったときには「先生、私たちはこう思っているけど、他に方法ありませんか」と言えるまでになった。

「体験」にはいろいろあるが、子どもだから分からないと安易に教えるのではなく、あれこれしてはいけないと言われてきたからできないだけで、子どもはもともと作る力や発想力を持っている。これからの地域をつくる子どもには、自ら考えて、子どもだからこそ無茶苦茶やってみないといけないという発想が必要と考える。

子どもの力を伸ばしたいと思っている。

（委員長）

「こどもエコクラブ」の20年の活動の中で、次から次へと学び続けていきながら、どんどん力をつけていくことに、はっきりとした確信をお持ちでいらっしゃる。非常に大事なところをお話しいただいた。何かご質問等あれば。

（委員）

すごく興味を持って聞かせていただいた。教育長をされ大変忙しい中で、こういったことに取り組まれていることに大変おどろいた。「ふるさと教育」とよく言われるが、「ふるさと教育」の読み物資料であったり、副読本では、子どものものにはならないと思っている。自ら行動を起こす中で、ふるさとについて愛着がわいたり、再発見したり、いろいろな人を知ることが、ふるさと教育じゃないかと考えている。

また、あいさつやマナー、コミュニケーション能力は、人から教えられて身につくものではなく、自ら取り組み体験し獲得することが重要である。自ら取り組む中で、どういったあいさつをすべきか考える。マナーについても同様で、どういった服装で行くべきとか、どういったことに配慮すべきかを学習していく。

（委員長）

子どもはやはり実際に自分がやったことでないとなかなかアイデアが出てこない、生み出せないということである。まずはやってみる。自分たちで発見することが必要であるというお話があったが、「香美市をＰＲするパンフレットを作りたい」とか「歌を作りたい」というのもそういうところにあるのか。

（委員）

子どもたちの中には、もともと「香美市を良くするために」というテーマがある。香美市はいいところだからアピールしようという意見が出てきて、パンフレットやリーフレットを作ろうという意見が出てきた。それはたぶん、龍河洞や秦山公園をアピールしたいと考えたと思うが、香美市の良さをアピールして人に来てもらいたいと実行委員会で話をしているときに、そもそもこのリーフレットを誰が読むのか質問すると、子どもが「うーん」と考え込んで、もともとは市外の人に香美市を紹介しようと思ってはじめたけれど、どうも香美市内の人があまり香美市のことをよく知らないと感じ、今年は香美市内の人に読んでもらい、もう一遍ふるさとの良さを見つめ直してもらい、そのことを周りにアピールしてもらいたい。そういうねらいで作ることになった。

香美市をアピールするパンフレットだから、市外の人に向けて作りましょうと、大人がアドバイスをすると、もうそこで縛ってしまうわけで、子どもの柔軟性を大人が切ってしまってはいけない。だから子どもに丸ごと返すかたちで進めると、あとで「あっ、言わなくて良かった」ということになる。今後も課題に対して一悶着起きると思うが、そういう過程を大事にしていきたいと思っている。

ゆくゆくは、大人になったときにこの社会をつくれる人材に育ってほしいというのが一番のねらいなので、結論は慌てない、みんなで話し合って知恵を出し合ったら、何かできるというところへ持っていきたい。

（委員長）

何かをやってみようとすると壁にぶつかる。そこでまた学んで、じゃあこうしようとみんなで考える。そういう力を育てる。体験してみないと分からないし、やってみないと分からないということ。

（委員）

こども会議で一番もめたのが「子どもの祭り」で、賛成・反対が半分に分かれて、大議論が１時間半ぐらい続いた。子どもだけでお祭りなんかできるはずがない。受験生もいるのにそんな時間取れない、大人がやっているお祭りに参加するので十分じゃないかと意見が出た。すると一方は、いやいや子どもが自分たちでしないとやったことにはならない。どこまでできるか分からないけど、自分たちでやるんだという議論があり、両方が平行線になってしまった。そこで実行委員が「両方の意見はよく分かりました」といって、「もう私たちに任せてください」、「お祭りはやりましょう」、「こども会議は何かをやるために立ち上げたものだから、やらないと意味がありません。だから、何かの形でやるのでもう任せてください」と言うと、こども会議のメンバーは了解する。子どもってそういう感じなので面白い。

（委員長）

議論が起こったのはどんな子どもたちだったか。

（委員）

実行委員会のメンバーは、運営や司会･記録をする子どもで、意見も言えることにしている。こども会議に参加するメンバーは、学校の代表としてみんなで話し合ったことを伝えて実現したいと思って来ているので、議論が白熱した。

実行委員会では、もし何か意見が分かれてしまったり、それからこんな意見が出たときはどうするかを事前に話し合っていた。その中で、そもそもこのこども会議は、私たちの考えたことを実現するためにでてきた会議なので、しないと意味がない。もめたときには、意見を十分聞いたうえで、私たちが「する」と押し切ると言っていた。「ええ、大丈夫」と問うと、「任しといて」と言った。会議では、時間も迫り、どうなることかと心配したが最後はすんなりいった。

（委員長）

熱い思いをもった人が核となっている、それが大事。

（委員）

今の話を聞いて一番関心を持ったのは、「子ども主体のお祭にしたい」という１行だった。何をするにも主体性が成功するかどうかを決めると思うので、これは本当に子ども主体のお祭りができたらすごいと思う。周りが手を入れると主体性を奪うことにつながる。するとやる気が落ちてしまう。

（委員）

お祭りに中学校がお店を出して、焼き鳥やウインナー等を売ったりしている。子どもが参加している学校もある。そういう子どもたちはお祭りのやり方が分かっているから、賛成派かなと思ったら反対なんですね。
「あれは、大人の人がやってくれるお祭りだもん。先生が歌いましょうと言ったら歌っているけど、お祭りなんかやったことありません」、誰も「やったことありません」と答える。大人はやっていると思ってるけど、子どもの意識は全然違う。子どもは自分で動いてないとやったことにはなってない。

（委員長）
「はたのおと」では、２歳～57 歳までのメンバーがいるけれども、やらされ感を残さないように、気をつけながら工夫されているということでしょうね。

（委員）
みんながやっているわけではなくて、これをやりたいっていう人がプロジェクトリーダーになっている。だからプロジェクトリーダーが何人もいて、その人が最初から最後まで責任を持つ。完全にグループ分けされているわけではなくて、一人の熱い人がいてそのときに関心のある人が寄っていく感じである。

（委員長）
そういう体験を仕組んでいくことが大事。
やらされ感だけが残るような体験が多く、体験、体験と言葉では言うけれども、そういう体験をここでは求めているわけではない。工夫なり、あるいは考え方をベースとした体験活動がどういうふうに増えていくか考えていきたいという意味では、大変大事な事例だと思う。

（委員長）
次に移らせていただく。
前回の会議で要望していたことについて、事務局が資料を用意しているので、紹介していただいてから休憩に入りたい。

【事務局より資料説明】
資料１　社会教育関係団体の活動状況（子ども会、ボーイスカウト、ガールスカウト）
資料２　スポーツ少年団の現状
資料３　コミュニティ・スクールの現状
資料４　学校地域支援本部事業について
資料５　プレーパーク（冒険遊び場）について
資料６　青少年教育施設の利用状況
資料７　高知県の子ども・学校の現状について
資料８　「まち・ひと・しごと創生法」について

（委員長）
前回の会議で要望していたことに関して、事務局より資料説明をいただいた。
県の社会教育行政としては、子ども会、ボーイスカウト、ガールスカウト、スポーツ少年団等の、いわゆる社会教育関係団体と言われている団体を相手に仕事をしている。ですから、ここで論議されたことを、そういう団体への支援のあり方や、団体へのかかわり方にどう反映させるかが県としては大事だということ。
次に、県の社会教育施設が６館１分館ということで、青少年施設、宿泊・スポーツ中心の施設であるが、県が基本的

には直営しているところなので、そこの事業のあり方、利用をめぐってどういうふうにしていくかは、県の教育委員会としては大きな課題である。

それからプレーパークの説明があったが、自然体験あるいは子どもたちの遊び場の県内の状況についての質問について、全国的な状況と県内の遊び場を紹介していただいた。他にもまだまだあると思うが、県教育委員会でこういうふうな把握をしているということ。

次に、コミュニティ・スクールをはじめ、放課後子ども教室とか学校地域支援本部の説明があったが、これはいわゆる学校と地域の連携が制度的に進んできて、その中で学校を核にしながら、さまざまな体験活動やあるいは地域づくりが一方で進んできている。そこにも県教育委員会生涯学習課が力を入れて援助しているわけで、それについても関連があるということで資料を出していただいた。

最後の「まち・ひと・しごと」再生戦略だが、これはこの会議で協議をしていくうえで背景の一つでもある。自然再生が地域の創生や再生にどのようにつながっているかということで、大きな背景として押さえておきたい。最後に説明のあった「小さな拠点」、高知県は、集落活動センターのようなものをつくっていこうという方向だが、もともと社会教育というのは、公民館をはじめとして、集落など小さなところから地域をつくっていこうという考えがある。残念なことに、高知県は公民館活動があまり活発ではない歴史を持っているが、今こういう集落活動センター等の「小さな拠点」が注目されている。もともと公民館でやってきたことが、名前は違うけれども、その機能に光が当たってきているということである。

こうした理解の中で、体験を通じて、地域づくりや地域の再生がどのようにながっていくのか、そこを結びつける方向でこの協議を進めていきたい。

（休憩）

（委員長）

前半部分で協議に戻したいと思う。

（委員）

自然が身近にある地域の子どもたちは、体験活動を通した学びがあると思うが、先ほど「とさっ子タウン」の話があったが、都市部の子どもたちが、いろいろな職業体験ができるということで、多く参加している。子どもたちの反応とか、そこでの学びを中山間の方にいかにつなげていくかということも想定できるのではないか。

（委員）

感覚的には、都市部の子どもたちと、例えば自然がたくさんある幡多の子どもたちを比較してもあまり変わらない。幡多の子どもたちにも、川で遊んだことがない子がたくさんいる。都会で魚の研修をしたときに、一気に入り込む子どももいる。恐ろしいほどの集中力で、詳しい知識を知ってという感じ。

都会とか田舎とかの差ではなく、集団の中には、やっていくうちに入り込む子どもがいる。その子が周りにすごく良い影響を与えて、集団の学びが深まるという感じ。その意味では、はじめに突っ込んでいく子どもがいるかどうかで違ってくると思う。

私の体験談だが、小学校５年生のときに自然観察に行った。私は生き物がその頃から大好きだったので、そのときの講師の先生の昆虫の話を聞いて、申し訳ないが自分の方がより知っていると思った。講師の通り一遍な話だったので、つまらないと小学校５年生の私は思っていた。

その講師があちこち観察に連れていってくれ、やはり新鮮味のない話をしていたとき、突然「こっちへ来るな」と言われた。その人は一気に水溜まりの中へひざまで入り、写真を撮り始めたんです。どうやらすごく珍しいトンボがそこにいたらしく、仕事を放り出して突っ込んでいった。それを見たとき、この人は本気なんだなと思い、それから講師の

話に興味を持ち始めた。だから、子どもたちにそういう姿を見せるか否かで大きく変わってくると思う。

（議員）
子どもが自らという前に、やはり大人が導きつなげていくことがすごく大事だと感じた。

（委員）
大人が子どもの方を振り返って教えてあげるという感じだと子どもは冷めてしまう。その人の生き方として、もう走ってしまってる人を見ると、反応すると思う。

（委員）
報告の中で、「こども会議」の実行委員会の子どもたちが「任してください」と言えるところまで、どうのように育て上げたのか、その過程を聞きたい。

（委員長）
ほったらかしにしておくと駄目だけれども、かといって、あれもこれも大人がやってしまうといけない。その辺のさじ加減を実行委員会では、どういうふうにされたか。

（委員）
そこが大きな課題ですね。高知県内で、特別活動に重点を置いている学校であったり、特別活動にきちんと取り組んでいる学校がどれぐらいあるか。高知県の大きな課題の一つであると思う。道徳は、どの学校でもきちんとできてると思うが、特別活動の方は内容がいろいろあって、学校行事が多分多いと思うが、これは教師がすごく入り込んでやるから、子どもがどこまで考えてやってるか疑問である。生徒会活動とか児童会活動も時間を取ってやっているが、そこを子どもがちゃんと自主的に、主体的にできているという課題もある。
ほんと力がついていない。そこが何かというと、学級会活動では、子どもたちが自分たちの課題、問題を出し、それについて議論をして決定したりするような時間が、おそらくどの学校も十分に取れてない。
市内約 1,700 名の子どもの代表になるのは 20 人弱、その子どもたちが会議の進め方を全く知らない。はじめ３回の実行委員会を持ち本番のこども会議を開催する予定であったが、学校で議論して意見を出してくるので、この会議はもう少し回ると思っていた。
ただ、子どもたちが育ってないことが予想されたので、子どもに「先にこうしたらいいよ」と言わないようにしようと確認した。子どもにどんな係が要ると思うか、どうやったらこども会議ができるのかのイメージ化から始めて、子どもに投げかけた。すると、役員が要るというので、どんな役かを聞くと、会長、副会長、会計、それから書記が要る。それから広報の係が要るというように係が出された。それを私がやりますと取っていく。これは係活動の決め方と一緒。
小学校も中学校も高校も似たようなもので、「はい」と手があがらない。高校生は、オブザーバーのように見ていたので、「はい、やります」と会長を引き受けたのが小学校６年生の女子、おっと大丈夫かなと思って、「じゃあ副会長は私がします」と申し出たのが中学校の女子２人、あと会計や広報の係を「ここは私がやる」というふうに決めて行った。
いざ始めると、「はい」と会長に手をあげた小学生は、やり方を全然知らないので先へ進まない。みんな待ってるが全然仕切りがないので、とうとう副会長が、アドバイスするとそのとおり言う。また途絶える。もう大人も子どもじりじりじりじり。それで１回目は、どのようにすれば会議をうまく進めることができるか、考えてくることを確認し終了。当日までに、市の担当はその女子の会長のところへ行って、どうやってやりたいとかを一生懸命引き出す。そうして開催しても次もまた同じ。
そのあたりから高校生がこれではいけないと思いはじめ、「ちょっと意見なんですけど」と言い出した。だんだん高

校生が少し前へ出てきて、副会長がだんだん考えだして、会長を立てながら、こうやってみようとやり出した。
３回目は準備の予定であったが、時間不足で結局中途半端で終了。こども会議の日を迎えることになった。
準備のとき席を子どもが台のような形にしてあったのを、子どもの意見を聞かずに大人がちょっと形を変えると、自分たちの思ってたのとは違うとなる。やはり子どもには子どもの思いがある。だから、そのまんまやらせて、そこでまずかったねと言ってあげないといけないということが非常にはっきりする。
失敗することを覚悟してとことんやれば、子どもの学びは大きいだろう。１回目の会議で、たくさん意見を拾い出したかったが、結局「あいさつ運動」と「ごみ拾い」だけになってしまった。これではいけないということで、大人から「もう１回会議してもいいですか」提案すると了解したので、２回目を開催することになった。１回目の経験があるので、次どうすればいいかを、高校生を前へ出しながらやり方を探り決めていった。
場を踏んでいくと、こども会議というのはやりたいことをやるための会議だから、２回目の会議がぐずぐずしたら、意見を十分出しておいて実行委員会が引き取ろうと子どもたちが決めていた。大人が言うと簡単にきれいにできるが、実は子どもの力にはなってない。

（委員長）
その大人とは、教育委員会の関係者や教員ですか。

（委員）
教育委員会の指導主事や研究所の方などが、かかわって進めている。学校の先生も来るが、総合学習とか特別活動があまりできてない。やってないことはないが、先生の仕切りの多い学習に多分なっているので、学校の先生にどう伝えるか大事になる。
引率の先生たちの顔を見ていると、「できるはずない」と思っていることがよく分かる。だから、先生にできるだけ口を出さないよう話してあるのだが、子どもは先生からメッセージが来ると、「はい、無理だと思います」って言ってしまう。一方、考えてくれている学校の先生は、もう言いたいけど言わずに一生懸命口をふさいで離れて見ている。子どもの主体性を育てるということで徹底していきたいと考えている。

（委員長）
聞けば聞くほど、人が育つ組織あるいは人が育つ体験の場をどういうふうにつくっていくか、非常に大事なご意見だ。

（委員長）
次の話題に移る。私から委員長メモを出させていただいた。前回と今回のお話を少しまとめないといけないと思う。つまり前回と今回は、体験活動のあり方、体験活動を学習へ発展させるにはどういう働きかけがあるのかということだと思う。
その中では、体験活動の意義、先程来出ているどんどん次の学びが生まれてくるとか、あるいはそれが総合的に動いていくとか、あるいはそこには必ず熱い人とそのネットワークがあるとか、それぞれの委員のご経験からたくさん語られたので、まずはこれを整理しておく必要がある。現状はどうかというと、どうもやらされ感の多い体験が多いのではないかとか、あらかじめ準備しすぎてしまっているんじゃないかとか、分野やテーマを課題だと思い込んでしまって、人を育てるとか、そういうことが課題に据えられていないなど、体験のあり方あるいはその意義、課題というものを整理しておく必要がある。
併せて、「ふるさとを愛する心を育む体験」という形容詞が入っている。しかも、そのことが中山間のいわば地域の活性化というものに結びつくのか、社会教育的なアプローチをお話ししたうえで、次回のテーマに結びつけていきたい。
１　この協議の全体テーマは、多様で意義のある体験の場あるいはそういう機会をたくさん地域に増やしていくことが、結果的には地域の魅力を再発見したり、再創造していく、あるいは相互に切れてしまっている関係を編み直したり、

地域課題を探り、解決していく知恵と力を養うことに向けた地域学習というものに結びついていくのだろう。体験をともなったものをたくさん増やしていくことは、地域学習の展開に位置づけられると思う。社会教育というのは学習を援助する働きかけなので、このような地域学習、それを援助する社会教育のあり方が求められている。

具体的には、体験活動の場あるいは体験活動を生かしたふるさと教育、地域の魅力を発見して、再創造していくような、教育の振興ということになると思う。

２　ふるさと教育の方針あるいは「ふるさとを愛する心」と言ったときに、例えば学校応援においては、学習指導要領や教育要領にも書かれているということで、視野には入れておきたいと思っている。

幼稚園というのは、経験、生活経験や遊び経験を通して総合的に人を育てていくわけで、単に人間関係や環境だけではなく言語や表現や健康など、総合的に考えていくわけだが、教育要領の中ではこんな表現の場があって、その地域を残していきたいとか大切だとか、これがある意味ふるさとを愛する最初の心を育てるよう書かれている。

小学校でも、中学校でも「ふるさと教育」の目標・方針というのは、学習要領に書かれているが、地域やあるいは職場や家庭ではそもそもこういう区分はない。

例えば、地域で改めて「ふるさと教育」を、何を目標にどんな方針で進めていくかを整理する課題はあるだろう。学校応援というものも踏まえておく必要があるだろうと思う。

「青年期における地元志向性」と書いたが、学校応援というときは幼稚園から義務教育までしか書いていない。高校生や大学生の年代をどう考えるか。私は地域協働学部というところに所属しており、近年の傾向として若者、青年たちに地元志向が出てきている。

しかし、一方で残れないというジレンマが彼らにはあって、そのジレンマを一方で考えつつ、「ふるさと教育」というものを進める必要がある。学校応援の取り組みの一つの影響かと思う。何か自分は地域に貢献したいんだという学生の傾向は見られるわけで、それらをこの協議の中に取り込むことである。

３「ふるさと教育」の内容を考えたときに、今日の話題というのは自然体験が多いが、私は領域・分野を超える共通して流れる深いものをどう考えていくかが大事だと思う。ここにある地域の「ひと・もの・こと」、これが例えば自然であったり産業、あるいは歴史・文化、あるいは伝統行事といったような、高知県内でも「ひと」と「もの」と「こと」というものを体験活動を通じて学び合いながら「ふるさとを愛する心」を育むたくさんの実践があるだろうと、そういうものを紹介していくことが必要ではないか。

事例集を作成することもあり得る。ふるさと教育を進める事例集、あるいはそれをもう少し分析して、こんな共通点があるとか、こんなところに工夫があるとか、ポイントや成果なども合わせたまとめ、報告をつくっていくようなイメージ。委員の方々それぞれ得意分野をお持ちなので、そこを生かして協議をすることも考えている。

併せて、もう一つ、高知県ならではのというあたりをどうするかという課題があると思う。検討の二つ目に入れている。

４　この協議は県の教育委員会への提案になるので、「ふるさと教育」を推進する体制の整備あるいは県の役割、自治体の援助ということもあるし、関係団体やＮＰＯ、審議会をはじめとした組織等をどのように支援体制やネットワークが組めるかということ、あるいは人材の養成や、推進体制の整備についての検討もしていきたいと考えている。

以上、今後の方向あるいは論議の提案ということになるが、いかがか。

（委員）

「ふるさとを愛する心を育む」体験活動を進めるとき、その段階があると思う。

（委員）

嶺北高校の生徒たちは、将来地元に帰りたいという生徒が 80%以上いる。知事も来られて、自己肯定感が高いことにすごく感心されていた。今後、県下の高校を全体的にその方向に持っていきたいとも言っていた。

ただ、そういう思いは高校だけで育つものでもない。中学校でも、地域へ出て行きいろいろな体験活動をやっている。

中学校から地元を出て行く生徒もいる。でも、中学校の段階ですでに生徒たちはそういう思いを強く持っている。
基本的に 18 歳までは地元で育てようということで、我々もいろいろ活動しているが、小学校の段階、それから中学校の段階、それから高校の段階と、その体験活動もいろいろと変わっていくと思う。それらが、ずっとつながっていなければ、最終的にそこまで行かないのではないかなと思う。
最終の提言に向けて、どういう体験活動が実践的なものなのか分析をしたうえで、まず県の役割を示していくのか、それとも、各委員が前回会議からいろいろと発言した内容をまとめて、最終的に提言に持っていくのか。どちらが良いのかと思った。

（委員長）
私も今二つ目の方は、最初にその県の役割を現状の中から出しながら、それに向けて肉付けしていくやり方の方が見えやすいと思っている。
最初の方は、「ふるさとを愛する心」という抽象的だが、これがどういうふうに育まれるのかということとその時々にどういう経験、体験を積んでいくことが大事で、そこにどういう留意点があるのかをまとめる必要がある。特に高知県を考えると高校生、今高校再編を含めて、非常に地元と高校の関係が大事になってきている。18 歳まで地元でというのを一つ姿勢にしながら出していくのは有効かもしれない。

（委員）
ふるさとを愛する「心」になっている。「幼児・児童・生徒」ではなくて「心」。もし、愛する子どもを育てると言うときの、「育む」、「育てる」とどう違うのかなと思って聞いていた。

（委員長）
そうですね。違うんでしょうね。

（委員）
やっぱり子どもを育てると一緒なのか。

（委員長）
いや、必ずしも子ども対象とは限りません。

（委員長）
大人も入っているし、仮にそこを離れたとしても、そこに住んでいなかったとしても、心をずっと持ち続けるというような、側面を持っている。というような、もう少し広い意味で「心」という。

（委員）
コミュニティの活性化なので、当然地域を元気にしていくしくみも入るのかと思う。

（委員長）
地域の活性化というのも、いろいろな活性化のあり方がる。ここだけですべてができるわけではないので、学習とか教育とか人が育つとか、そういう側面から地域が活性化することを考えている。

（委員）
私は全部がつながってるとは思う。高校にしろ中学にしろ小学にしろ、地域振興計画には全ての子どもたちが関かわ

っているし、特に高校は地域振興の要だと思ってる。そこが核にならないと地域振興はあり得ないと思っている。心が育っていればコミュニティに全部つながっていくので、あまり「心」にこだわる必要はないのではないか。

（委員）

「体験」をテーマにした学習は、以前から大事だと言われ続けていて、そのために、例えば今日提供してくださったパンフレットや冊子等、たくさんのものがつくられている。ここで求められているのは、それらをまとめるということではないと思うので、たくさん出されているものを活用しながら、今回のテーマの「ふるさとを愛する心」を育む体験活動を中心として、活性化をいかにすればよいかを提言することが我々の役目だと思う。

総合的な学習の時間や特別活動のところは、生涯学習課だけでなく、小中学校課の中でずっと課題になってきた部分だと思う。そこへ生涯学習課から、どう切り込むかが難しいことかもしれない。今学力の問題があり、そこに力を入れてきた。学力・学習状況調査のデータをを見ると、いろいろなところにポイントを置いて教科の学力が上がってきてる。足りない力を、ポイントを定めて上げてきてるという高知県の現状がある。今年から中学校の教育課程で、探求的な授業を行う特別な研究指定校をつくって、本物の力をつける研究校を置いて、中学校がどんどん開発的な研究をしている。

このように小中学校課も随分切り込んでいるが、以前から課題になってる、総合的な学習とか特活が弱いという高知県の実態はまだあると思う。その辺は、実践を高めないといけないということは、提言できると思う。それから実践事例を出すことも必要、幼稚園とか保育園とか小・中・高とか、段階を追っていい事例がすぐ集まるとは思う。プログラムがあるので、これならできますよという話ではない。最終的には自ら動く子どもにしないといけないと思うので、それを見通したうえで、「ふるさと教育の内容」については提言ができるのではないか思う。

実際まとめるときには、現状があったり、分析があったり、それに対する方策を幾つか提言をしながらということにはなると思うが、前回のときにコミュニティ力を高めるということで、コミュニティ・スクールや学校支援地域本部の、担当の指導主事も配置し、地域本部も増やしてくれている。だから、あの実践も浮上してくるはずなので、そういういい実践も成果を入れながら、提言できると思う。

（委員）

お二人の報告を聞いて思うことは、Y委員の場合は、環境保全という一つのプロジェクトで共同体が形成されていて、子どもと大人が共存していて連続線上にあるということだと思う。こういうところに多くの予算をつけていいのではないかと思う。一方で、教育長の報告で際立っているのは子ども対大人という対立軸であって、そこから新しいものが生まれていることに感心する。大人と子どもの関係性が問われているということだろう。

いずれにしろビジョンを持ったコーディネーターがいるところがうまくいくんだということをすごく思っていて、子どもの「ふるさとを愛する心」と言うときには、その未来を、子どもが世界をつくり得るとか、子どもが世界を変えられるという有能感とか希望が「ふるさとを愛する心」につながると思う。私がふるさとを愛しているのは、空の広さとかなのだが、そんなことが非常に大きなファクターとしてあるのではないかと思っている。

資料の中で、子ども会とボーイスカウトの人数が非常に少なくなっているというのは、おそらく活気がないんだろう。そこには、ビジョンを持ったコーディネーターがいるのかとか、子どもの中に主体的なやりがいを持てるような活動があるのだろうかという検証が必要だし、そこから新しい器がどんどん実は生まれていて、その新しい器をリサーチすることも大きな視点ではないかと思う。

（委員）

既にあるものを見直していくことを重視していく必要があると思う。それを前面に出していかないと、我々が今議論していることはなかなか実現が難しいと思っている。例えば、地域と一緒に防災訓練をやっているが、やはり訓練で終わってる。

子どもが計画に従って行動するだけでは何も学習できていない。全て役割分担の中で動いて大人がやらせるから、い

かがなものか。

（委員）
　それは「体験」でも何でもなくて、単なる行事に参加しているだけ。しかし、子どもは毎週のように行事に引っ張り出される。田舎の方は子どもが減ってきても、やはり子どもたちに参加してもらいたい。お年寄りが喜ぶから参加してもらいたい。もう一つは、役所が子どもをすごく使いたがる現実がある。
　子どもたちは引っ張りだこだが、体験学習にはなっていない状況がある。
　子ども会が減っている一番の原因は、小学校が減ってること。かつては学校単位で子ども会があったのが、統合されて子ども会も一つになるので数は減ってしまう。そのことが子ども会の減少、衰退にながっている。

（委員長）
　整理すると大きく二つのテーマがあって、体験活動の課題をどう考えるかということ。体験活動の中身については、もっと子ども主体でやりましょう。あるいは、やらされ感だけ残るような体験はやめましょう。というふうに言える。
　もう一つは「ふるさとを愛する心」の部分では、「ふるさと」とか「地域」とか「希望」とか「創造」とか「夢」とか、そういうことに視点を置いて体験活動を考え直してみるという両方である。ここには、「ふるさとを愛する心」がコミュニティの活性化につながるという仮説がある。

（委員）
　キーワードは「主体性」だと思う。「高知県ならではのふるさと教育の創造」というところが非常に面白いと思ったが、高知県の特性として主体性を持っている人が多いと感じている。それは個性と言い換えてもいいが、だからまとまらない側面もある。それを発見させる機会をどうつくるかが大切である。
　大学生が地元に帰りたいが、自分が何をしたいのか分からないという、それは、課題が何か分かってないので解決策も分からない状態。主体性を発見させる機会をつくれれば、すでに地元志向はあるので、そのまま地元に残って頑張る人や、外に行って大きくなって帰ってくる人もいるだろう。そういう機会づくりができれば大成功なんじゃないか。

（委員長）
　生き方とかその本気度が体験できること、そこに人を動かす、人を育てる原動力があるのではないかということだが、
　あわせて、宅間委員は、歴史民俗資料館で、歴史とか郷土をテーマにやってらっしゃるわけですけれども、その歴史を学ぶということの意味、あるいはそういうものとここの部分がどのように整理できると考えるか。

（委員）
　今回のこの協議のテーマの中には中山間地域ということがある。中心部と中山間地域では環境に違いがあるのではないかと思う。中山間地域を考えるときには、環境というものも考えなければならない。中山間地域で地域の魅力、何をを求める、どんなことが行われている。ということも洗い出してみる必要があるのではないか。
　それと「ふるさとを愛する心を育む心」の場合では、やはり地域の魅力というものを十分理解しない、郷土を愛する、ふるさとを愛する心は育ってこないとこう思う。
　つい先日、吾北村の津賀谷の棚田の火祭りへ行ってきたが、その中で小学生が手太鼓を演じていて、話をする機会があったが、初めてそれを経験したということで、そこからまたこの「ふるさとを愛する心」が出てくるのではという思いを非常に強くしたことだった。

（委員長）
　歴史・文化・伝統だけでなく、産業や自然、そこにもう一つ、人々の生き方や暮らしの在り様もその地域の魅力の中

身だろうと思う。その魅力をより主体的に感じ取る経験や体験がふるさと意識を生んでいくのではないか。
　そういう流れの学習プログラムがもっと増えていく、そのための働きかけを県教委としてどうのようにできるか、その部分について考えていきたい。

【事務局提案】
　第３回高知県社会教育委員会は現地視察を予定。
候補地としては、「土佐山アカデミー」と「魚と山の空間生態研究所」

３．高知県教育委員会事務局生涯学習課長挨拶
（生涯学習課長）
　委員の皆様、長時間にわたり活発なご協議ありがとうございました。前半部分においては、「主体性」というキーワードについていろいろなご意見をいただき、個人的にビジョンが見えた気がしている。後半部分については、一つはこの会議でどこまで議論するかということ。例えば一つは学校教育とここの議論との関係、もしくは子どもたちが中心にはなるだろうが、大人とかそういった部分をどこまで見据えるかという議論もあった。
　社会教育というものが学校の教育課程を除く組織的な教育とされているので、最終的にはこの委員会の権限として、直接的には学校教育の外の部分について提言するということになるが、ただ、すべてがつながっているというお話もあった。特に「地域コミュニティの活性化」とか「ふるさと」など、非常に広いテーマを扱う以上、そういったことを抜きには議論できないと思う。担当課としては、広くご議論いただくことでより深まるだろうと考えている。最終的にどういう表現で提言するかは、最終段階で考えていただければと思っておるところ。
　もう一方の「ふるさと」ということに関しては、伝統文化などキーワードにはなってくると思っている。さらにご議論を深めていただき、次回以降も活発なご議論をお願いできればと思っている。
　本日は誠にありがとうございました。